公益財団法人

阿蘇グリーンストック

中期構想

2022 年 5 月

公益財団法人 阿蘇グリーンストック

目次

はじめに（中期構想の位置づけ）………………………………………… 1

１．草原の価値について………………………………………………… 2

２．公益財団法人阿蘇グリーンストックの理念について……………… 5

３．これまでのあゆみ……………………………………………………… 9

４．ストック部分（緑を守る事業：野焼き支援ボランティア・調査研究）………… 10

５．フロー部分（人と人の交流促進事業・緑を活かすための事業）……………… 15

６．他団体との連携 ……………………………………………………… 21

７．経営基盤の強化 ……………………………………………………… 23

資料編

１．阿蘇グリーンストック中期構想検討委員会の経緯…………………… 24

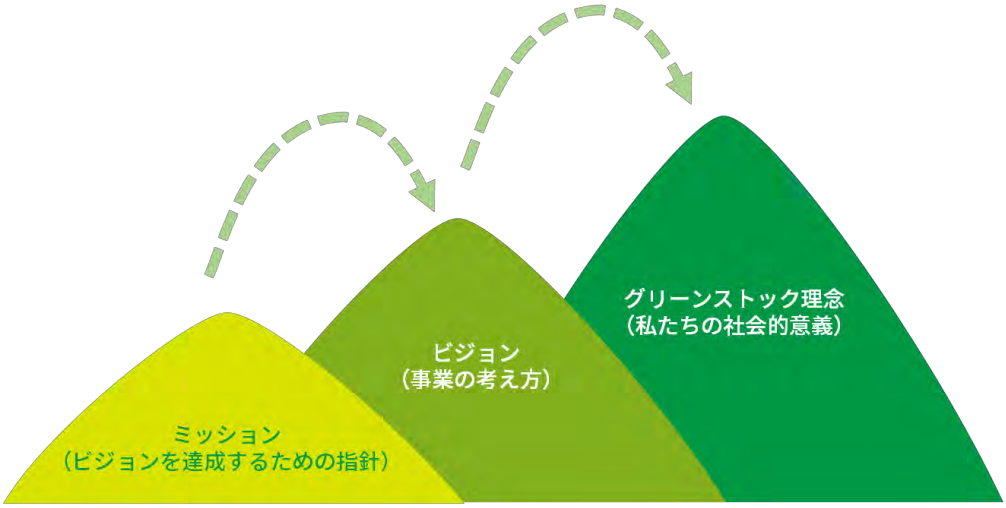
２．阿蘇グリーンストック中期構想検討委員会　委員構成……………… 25

３．阿蘇グリーンストック中期構想検討委員会　設置規約……………… 25

はじめに（中期構想の位置づけ）

公益財団法人阿蘇グリーンストック（以下、阿蘇グリーンストック）は 1995 年に設立され、2025 年には設立 30 周年を迎えます。この節目を迎えるにあたり、今一度現状を整理し、これからの財団の進む方向性や目標など、おおむね今から 5～7 年後（今回の中期構想では 2027 年）を見据えた中期的な展望を検討しました。この中期構想では、これまであった理念**「阿蘇の豊かな緑を後世に」**を私たちの社会的意義ととらえ、私たちがなぜ各事業を実施するのか、そのビジョン（事業の考え方）とミッション（ビジョンを達成するための重要な行動指針）を記載しています。

この中期構想を実現することで草原をはじめとした阿蘇の緑と水の生命資産を守り 5 年先、10 年先についても今と変わらない豊かな自然や文化がある阿蘇を守り、多様な視点で阿蘇に関わる人が増える社会の構築を目指します。



理念：阿蘇の豊かな緑を後世に

1．阿蘇の広大な自然環境と草原景観を国民共有の財産として評価し、都市と農村、企業、行政四者をつなぎ、これを後世に引き継いでいきます。
2．阿蘇の地域住民と都市住民をつなぎ及び企業・行政をつなぎ、土と命をいつくしむ産業を振興し、阿蘇の伝統文化と生業の維持・再生に取り組んでいきます。

ビジョン：地域の中核支援組織として機能する

1．農村、都市、企業、行政の4者をつなぐために、それぞれの声をきき、地域の解決策を関係者ともに提示し実践する中核支援組織 として機能します。
2．阿蘇地域の環境保全に係るコーディネーターとして、多様な主体とパートナーシップを組みながら、地域の実情に合わせてマッチングを支援し、自然環境部分を守ることを基本としながらも、それを活かして社会・経済を回しながら、地域を活性化していくことを目指します。

ミッション：持続可能な阿蘇地域の自然・社会・経済を構築していく支援を行う

1．緑を守るための事業・・・野焼きボランティア、調査研究
2．緑を活かすための事業・・・畜産、農業、観光、各種事業支援（協働・マッチング等）
3．都市と農村（人と人）の交流のための事業・・・教育・福祉、文化

図 1．中期構想の考え方

１．草原の価値について

阿蘇の広大な草原は人々がはるか昔より連綿と続けてきた営みと自然との関わりあいによってつくられたものです。阿蘇で春に行われる野焼きや、あか牛をはじめとした放牧、そして、牛馬の飼料のための採草、このような人の暮らしのなかで草原を利用することで阿蘇の草原はその姿を保ち続けてきました。またかつては茅葺き材や田畑の肥料としても活用され、阿蘇の人の暮らしと草原は密接に結びついていました。

現在、阿蘇の草原をはじめ全国各地の草原は生活様式の変化や産業構造の変化に伴い次第に管理放棄され、年々草原は小さくなってきています。草原を維持するためにはこれまでにない価値観や視点、アイデアを取り入れながら新たな人と自然とのかかわり方を模索していく必要があります。私たち阿蘇グリーンストックは阿蘇の草原を守るこれまでの仕組みを大切にしつつも、新たな草原の価値を見出し、それを守る仕組みをつくり、これから先、将来にわたって阿蘇の草原を見ることのできる未来を創ります。

この阿蘇の草原の価値は多岐にわたります。主なものを５点記載します。私たち阿蘇グリーンストックは草原を守ることに加え、様々な事業活動を通して、これらの草原の価値を守り後世へと引きついでいきます。

写真１：草原を守る取り組み（野焼き支援ボランティア）

（1）地域経済を支える

写真 2：阿蘇の放牧風景

阿蘇の草原は放牧や採草など畜産を支える場所として維持されています（写真 2）。阿蘇の特産のあか牛は豊かな草資源を活用した放牧によって育てられており、令和３年現在、4702 頭が放牧されていると言われています。あか牛は毎日、40～50kg の草を食べることから、草原を維持する役割も担っています。この草原は、集落単位の「入会地」として維持管理が行われてきており、実際に利用・管理にあたる入会集団として、集落ごとに牧野組合が結成されています。阿蘇全体では令和３年（2021 年）現在 156 の牧野組合があり、草原管理を続けてきています。しかし、平成 10 年（1998 年）には 175 の牧野組合があったことから、年々その数は減少し続けています。現在、野焼きを続けている多くの牧野組合でも組合員の高齢化や畜産をあきらめる農家が増えてきたことから、組合員だけでの草原管理作業（野焼き、輪地切り等）の継続が難しくなっている現状があります。

（2）九州の水を支える

阿蘇の草原に降った雨は、森林に比べてより多くの水を供給すると言われています。地下へ浸透した水は 20～30 年かけて地下を通り、豊かな湧水として阿蘇の人の暮らしを支えています。また、阿蘇は九州の主な一級河川の源流となっています（図２）。熊本県内の白川、緑川、菊池川はもとより、九州最大の河川である筑後川、大分県の大野川や宮崎県の五ヶ瀬川も源流をたどればすべて阿蘇山もしくは阿蘇の外輪山へたどりつきます。これら６河川の流域面積は約 9,000km^2 にもなり、流域に暮らす 500 万人の生活を支えています。

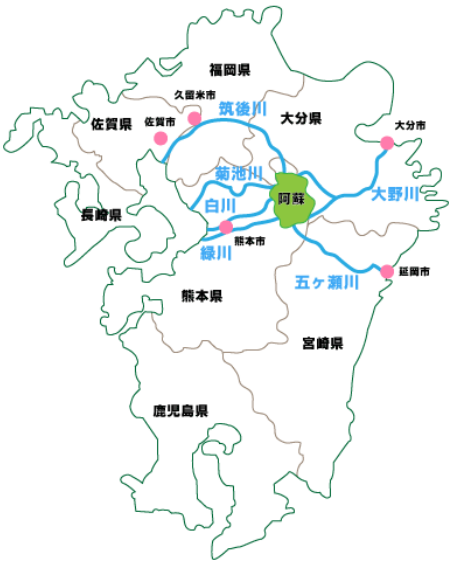


図２：阿蘇から流れる一級河川

（出典：阿蘇ペディア）

（3）災害を防ぐ

阿蘇地域は岩盤の上に厚く火山灰が堆積した地質です。大雨や大きな地震にさらされた際に表面の火山灰土壌が移動する斜面崩壊がよく見られます。崩壊地が草原である場合、森林と比べ崩壊する植生や土量が少なくなり被害の軽減につながります。さらに草原は植生の回復が早く、土壌侵食や崩壊再発の防止に役立っています。

（4）地球温暖化を防ぐ

阿蘇の草原では毎年春に野焼きが行われています（写真 3)。野焼きの際には大きな炎や煙が立ち込め、一見すると大量の二酸化炭素を出し地球温暖化につながっているのではないかというイメージをもつ人も多いかと思います。しかし、阿蘇の草原は地面に多くの炭素を蓄積し続けていることが近年明らかになってきました。野焼きの際に燃え残った炭や、植物の根などの分解物が土壌に蓄積し、その炭素蓄積量は 1 年あたり 6.9ｔ/ha とも言われています。この炭素蓄積量は阿蘇地域全世帯が 1 年間に排出する炭素量の 1.7 倍と言われており、草原を維持することで地球温暖化防止に大きく貢献できることが明らかとなってきています。

写真３：阿蘇の野焼き

（5）生き物を守る

阿蘇の草原には 600 種ほどの植物が生育しているといわれ、その中にはツクシマツモト、ハナシノブ、ヤツシロソウなど、全国で阿蘇で地域とその周辺でしか生育していない植物が多く確認されています。これらは中国大陸や朝鮮半島にも分布しているものがあることが知られており、これらは氷河期の頃、中国大陸や朝鮮半島と日本が陸続きだったことを示してくれる存在です。この豊かな草原は貴重な昆虫、鳥類、哺乳類といった生態系ピラミッドを支える基盤となっています。

写真４：草原に咲くヒゴタイ

２．公益財団法人阿蘇グリーンストックの理念について

（１）阿蘇グリーンストックの理念

公益財団法人阿蘇グリーンストックは、「農村と都市、企業と行政が提携して阿蘇地域の良好な農村環境を維持し、それを活用して緑豊かな余暇空間を創出するとともに、環境保護の精神の普及啓発に努めることにより、阿蘇の自然環境の保全に寄与する」ことを目的に設立された団体であり、グリーンストック（阿蘇の緑とみずの生命財産）を人類共通の財産として次の世代に残していく活動をミッションとして 1996 年から活動を行っています。

具体的には、以下の 3 つの目標をかかげて、その活動を始めました。

■グリーンストック憲章

１．阿蘇の農業者と都市の生活者が互いに手を携えて、土と生命をいつくしむ農業を振興し、安全でおいしい食物の普及に努めます。

２．阿蘇の自然環境を守るために、国民共有の土地を確保しこれを広げていくためにナショナルトラスト事業を興します。

３．環境にやさしい田園ホリデー事業を通して自然と共生する手作りの余暇空間を創り出し、人と人との触れ合いの場を提供します。

さらに、20 周年を迎えた 2016 年には、今一度阿蘇グリーンストックの在り方について検討を深め、新たに以下のような基本理念を定めました。

■グリーンストック理念：阿蘇の豊かな緑を後世に

１．阿蘇の広大な自然環境と草原景観を国民共有の財産として評価し、都市と農村、企業、行政四者をつなぎ、これを後世に引き継いでいきます。

２．阿蘇の地域住民と都市住民をつなぎ及び企業・行政をつなぎ、土と命をいつくしむ産業を振興し、阿蘇の伝統文化と生業の維持・再生に取り組んでいきます。

グリーンストック理念で掲げられた私たちの事業の考え方（ビジョン）は阿蘇の貴重な緑と水の生命資産を後世に引き継ぐために、その主役である“地域の農家や市民など草原保全の担い手”が困っている時に、農村、都市、企業、行政の４者をつなぎ、その解決策を支え手ともに提示し実践する中核支援組織として機能するということです（図 3）。そのために担い手である阿蘇の地元住民、様々な産業や教育関係者、そして、支え手である行政や民間団体、そして個人（有志）とのつながりを大切にしていきます。

図３．中核支援組織としての阿蘇グリーンストックの役割

・阿蘇の豊かな緑を後世に残したいという理念に共感する関係者との連絡調整機能
・草原維持に興味を持つ関係者との地域をつなぐマッチング機能
・草原関係の知識や地域の実情を把握し伝える、知の拠点機能
・地域の課題を国をはじめとした行政に伝える、アピール機能

言い換えれば、阿蘇地域の環境保全に係るコーディネーターとして、多様な主体とパートナーシップを組みながら、さらには地域の実情に合わせてマッチングを支援し、自然環境を守ることを基本としながらも、それを活かして社会・経済を回しながら、地域を活性化していくことが求められている組織です。

（2）SDGｓと阿蘇グリーンストックの事業との関係

この阿蘇グリーンストックの理念はまさに SDGｓのウェディングケーキモデル（図４）と同じ考えで整理できます。SDGｓのウェディングケーキモデルは 3 つの階層「経済圏」「社会圏」「生物圏」によって構成されます。根底に「生物圏」が存在し、この生物圏の上に、「社会圏」、「経済圏」が成立するというこのモデルは、「生物圏」の持続可能性なくして持続可能な社会や経済が生み出されないことを意味しています。

この考えをもとにすると、阿蘇の「生物圏」を維持するためにこれまで阿蘇グリーンストックが実践してきた活動は、まさに SDGｓの実践と言えます。また、このような社会的意義が明確化され、それをひたむきに実践していたからこそ、地元牧野組合をはじめ多くの主体とパートナーシップを組んでこられたと考えられます。

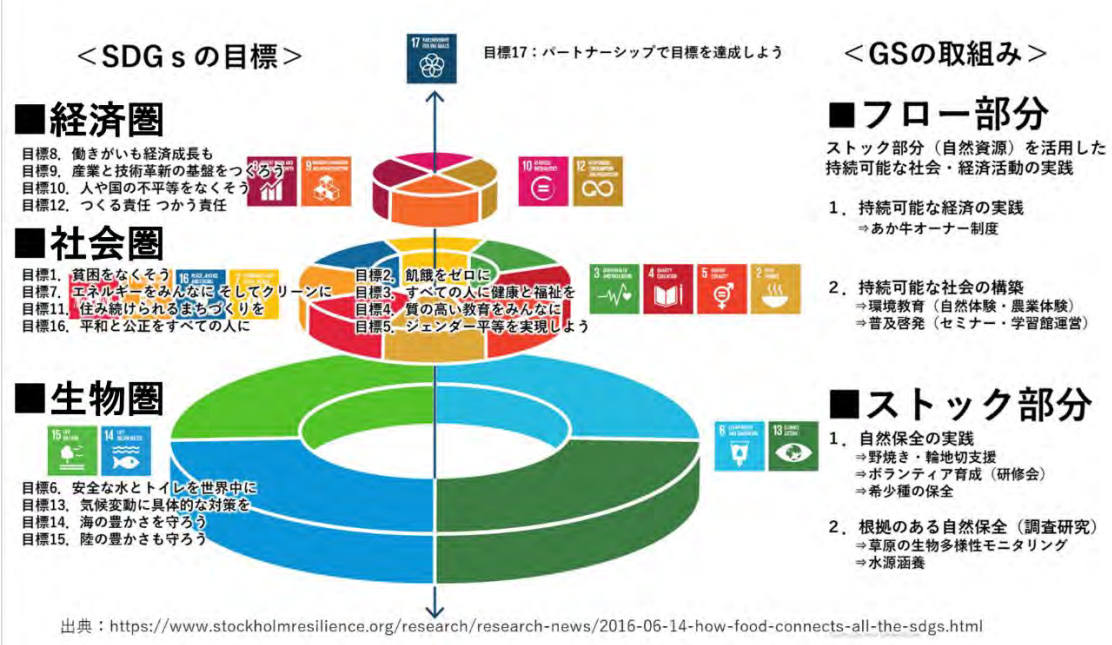


図４．SDGｓのウエディングケーキモデルとＧＳの取組みの対応について

SDGｓ（持続可能な開発目標）とは？
世界のリーダーが 2015 年 9 月の歴史的な国連サミットで採択した「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に掲げられた 17 の目標のこと。
持続可能な開発は、将来の世代がそのニーズを満たす能力を損なわずに、今を生きる私たち世代のニーズをも満たす開発と定義されている。
持続可能な開発を達成するためには、経済成長、社会的な寛容さ、環境保護という 3 つの主要素を調和させることが不可欠であるとされている。

（3）これからの阿蘇グリーンストックが目指していくもの

私たちはこのストック部分である「生物圏」＝「阿蘇の緑の生命資産」を最も大事にしつつ、フロー部分である社会・経済について取り組みを実践していくことがミッションとして求められている団体です。言い換えれば、自然を活かした教育、人材育成、農畜産業の振興支援等を実施し、さらに都市との交流を促進し、関係人口や活動への共感者を増やし、その結果として、阿蘇の自然環境を守るという仕組み（図５）を構築することが私たち阿蘇グリーンストックのミッションであると言えます。

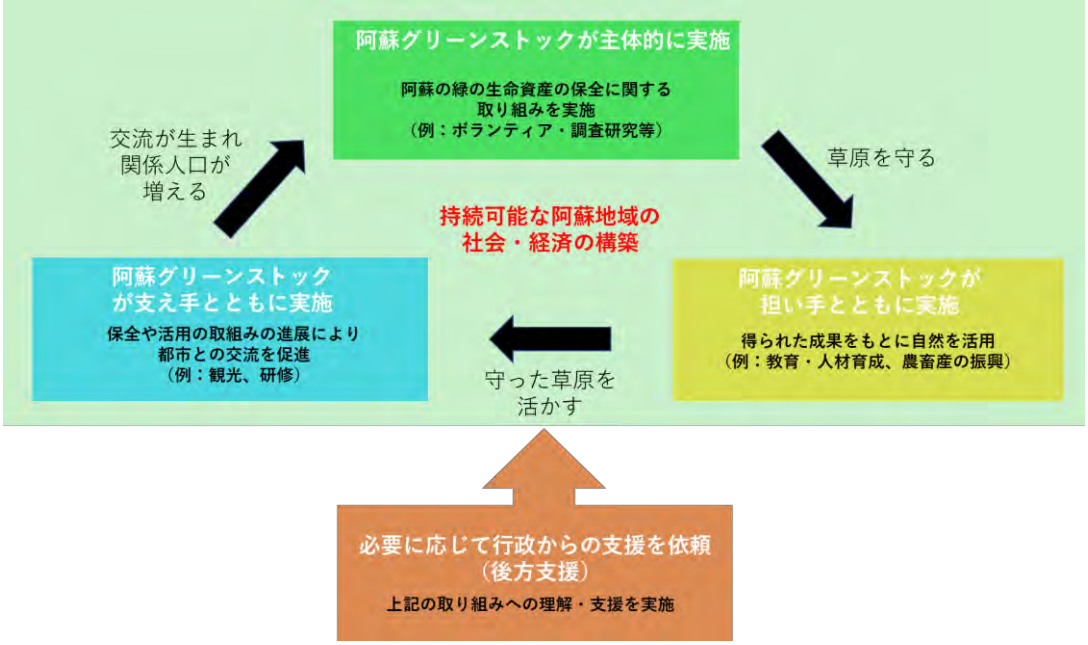


図５．　阿蘇の緑の生命資産をもとにした地域の環境・社会・経済の構築の考え方

このサイクルを回し続け、阿蘇の草原をはじめとする自然環境をベースに持続可能な阿蘇地域の社会・経済を構築していくために、私たち阿蘇グリーンストックは下記のような事業展開を図ります。

具体的な事業例

緑を守るための事業・・・野焼きボランティア、調査研究
緑を活かすための事業・・・畜産、農業、観光、各種事業支援（協働・マッチング等）
都市と農村（人と人）の交流のための事業・・・教育・福祉、文化

３．これまでのあゆみ

阿蘇グリーンストックは 1995 年に設立された団体です。

きっかけは 1991 年、「都市と農村の連携により、貴重な阿蘇の緑の生命資産を後世に引き継いでいこう」と「グリーンストック構想懇談会」が発足し、それから 4 年間の準備期間を経て広汎な県内の企業、団体、個人の支援により財団が設立されました。設立当初の活動は阿蘇あか牛の牛肉及び特産品の産直活動と森づくり活動でした。

転機が訪れたのは 1997 年でした。熊日新聞の創業 55 周年記念事業で 25 ページの紙面を使って「阿蘇千年の草原」特集キャンペーンが組まれ、1998 年には阿蘇草原募金の取組みが行われました。その募金の活用策を検討したところ、野焼き支援ボランティアという案が出され、1999 年の 2 月に第 1 回の野焼き支援のボランティアの初心者研修会が開催されました。2000 年に野焼き支援ボランティアの会が発足し、これ以後、多くのボランティアを受け入れ、阿蘇グリーンストックの理念である「都市と農村の連携により、貴重な阿蘇の緑の生命資産を後世に引き継いでいく」を具体的化した活動として現在まで 20 年以上続けてきており、現在までに累計 2 万人を超えるボランティアの参加、支援牧野も 60 以上となり、阿蘇の草原維持にとって欠かせない団体となっています。一方でこれまでの 20 年の歴史の中では不幸な事故のため、野焼きボランティアに参加した方の死亡事故も経験しました。死亡事故の後は安全対策特別委員会を設置し、事故の検証と今後の安全対策（マニュアル整備）を講じ、さらなる安全対策を進めてきました。

これまでの阿蘇グリーンストックの歩みでは、数多くの評価をいただいています。全国初の国立公園管理団体（2003 年～）となったり、「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞（2004 年）、第 1 回地域再生対象特別賞（2011 年）を受賞しています。

2014 年には熊本県が、「将来に渡って阿蘇草原再生の取組みを継続していくための恒久的な財源の仕組み」を構築し、阿蘇グリーンストックが各事業執行を担当しており、まさに阿蘇の草原保全・活用の司令塔として活動を続けてきています。

４．ストック部分（緑を守る事業：野焼き支援ボランティア・調査研究）

ストック部分である「生物圏」＝「阿蘇の自然環境」を最も大事にするための基盤として、野焼き支援ボランティアや調査研究を実施していきます。これらは収益を上げることはできない（難しい）部分になりますが、阿蘇の草原保全を考える上でのベースにある部分ですので、行政などの協力も得ながら長期的に実施可能な体制を構築する必要があります。また、動植物や水環境など自然環境に関わる部分についても知見の蓄積・共有を進めます。

（１）野焼き支援ボランティアの意義

野焼き支援ボランティア活動は、阿蘇グリーンストックの基幹事業で、阿蘇グリーンストックの存在意義としても、地域への貢献度、都市と農村のつながりを表すという意味でも重要な事業です。

単に、野焼きや輪地切り、草刈り作業を実施するだけなら、作業委託として他の事業者に委託をすることも考えられますが、このボランティアは「労働力の代替品」ではなく、阿蘇の草原が好きな人、阿蘇への想いが強い人など、多様な人の「想い」や「感謝」の気持ちから出る行動を実践する場としての意義も持ち合わせています。したがって、単なる作業ではなく、「草原のある喜びを感じ、また、後世に草原やその文化を継承する場」としてもこのボランティアは重要な意味を持ちます。また、このような「楽しみながら汗を流す」人たちを間近で見ることで、阿蘇に住む人の意識も変わり自らの地域に愛着を持つ事にもつながっています。このようにボランティアを通して単に草原を維持するだけでなく、「幸せの伝播」、「技術の継承」、「地域住民の理解促進」が図られることも野焼き支援ボランティアの意義として重要な部分になります。

（２）野焼き支援ボランティアが地域へもたらす効果

現在 159 ある牧野組合のうち、野焼き支援ボランティアを受け入れている牧野は約 60 あり、野焼き支援ボランティアを始めてからの 20 年間で阿蘇の草原維持には欠かせない存在となっています。多くの牧野組合が、高齢化や畜産・農業従事者（草原の恵みを享受する人）が減少し、自らの動員だけでは野焼きの維持が難しくなってきています。そのような中、このボランティア活動は阿蘇の草原維持の社会資本として機能しており、これからの未来に阿蘇の草原を維持していくためにも重要な役割を担っています。

（3）野焼き支援ボランティアの拡充

将来的に野焼きの地元の担い手が減ることは残念ながら必然的であると考えられます。その一方で、阿蘇草原再生協議会では 2022 年に改定した全体構想において、「30 年後の草原面積を現状維持する」という目標を掲げています。したがって、図 5 のように、牧野組合員や牧野作業への出役者が減っても、その分、より多くのボランティア等が支えることで、草原を維持することができるよう、より一層野焼き支援ボランティア体制を拡充し、地元牧野のサポートをできる体制を構築する必要があります。

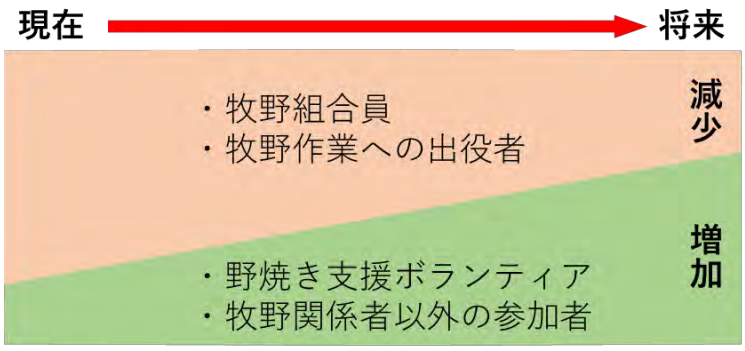


図 5．将来草原面積を維持するために必要なボランティアの考え方

阿蘇グリーンストックは野焼き支援ボランティアに対し、参加する充実感（やりがい）を持っていただくために、地域の人との交流、ボランティア同士の交流、学び（動植物や、道具の扱い方等）も合わせて提供し、阿蘇の草原と人々の関わり合いをサポートする役割を担います。また、ボランティアはすでに阿蘇の社会基盤の一つとなっていることからも行政等や牧野組合と連携してボランティアの拡充及び安全策の向上に努めます。そのために、以下の事項を実施していきます。

①野焼き支援ボランティアへの参加促進

ボランティア参加者の平均年齢が 2004 年には 51.9 歳だったのが、2020 年には 63.6 歳となり、この 16 年間で 12.6 歳上昇しています。これは、ベテランの方が活動を継続され、若い方の参加がなかなか伸びていないことが要因であり、このままではボランティア数は減少に転じることが予想されます。このことから、新たなボランティアの獲得、特に若い人のボランティアの獲得が必要となってきます。そのためには、企業の CSR 活動や大学生、高校生の課外活動としてのボランティア参加など、多様な関わり方を構築する必要があり

ます（表 1）。また、野焼き支援ボランティアの活動内容やその意義など、ボランティア活動時のみならず、事後の情報発信（コミュニケーション）も重要な要素になっています。このような点に関してはプロボノ（社会的・公共的な目的のために、職業上のスキルや専門知識を活かして取り組むボランティア活動及び人材）の活用も取り入れながら進めていきます。

表１．野焼き支援ボランティアの高齢化への対策案

課題	要因	対策	具体策
・高齢化	・新規で加入する人に若い人が少ない ・初心者講習会の受講者の継続が少ない	・魅力や誇りのある活動 ・参加する動機になるようなインセンティブ付与 ・初心者研修を受けやすく ・参加者からのフィードバック	・参加した成果の視覚化 ・きつさの低減 ・交通費等支給 ・オンラインによる研修の参加
・若年層の参加が少ない	・情報発信不足 ・時間がない	・惹きつける情報発信 ・企業との連携	・SNS による情報発信 ・企業の CSR 活動としての位置づけ

②野焼き支援ボランティアリーダーの養成

野焼き支援ボランティアの仕組みで重要なのが、ボランティアを取りまとめるボランティアリーダーの存在です。阿蘇グリーンストックではボランティアリーダー100 名を目標に掲げていますが、2021 年現在、名簿記載者は 74 名、年 4 回あるリーダー全体会議への出席者は伸び悩んでいる傾向にあり、現在 40 名前後となっています。ボランティアリーダーの人数の減少、出席率の低下による情報共有不足などは、野焼きの安全管理に大きく影響を与えるため、ボランティアリーダーの意見を取り入れつつ、改善を図ります（表 2）。

表２．野焼き支援ボランティアリーダーの不足への対策案

課題	要因	対策	具体策
・なり手不足 ・なり手不足による十分な安全確保ができず、支援活動に支障が出る恐れ	・責任が重い ・リーダーになる魅力がない ・会議のマンネリ化 ・（そもそも）なり手が少ない	・リーダー独自のインセンティブを設けることでモチベーションの向上を図る ・会議方法の改善 ・リーダーの負担の軽減	・交通費支給 ・表彰制度の充実 ・均等な講師依頼 ・会議のオンライン化

③野焼きにかかる装備等の充実、安全対策の強化

野焼きの際に、安全に直結するのが服装です。難燃性の素材を使った作業着や手袋、ヘルメットやゴーグル等、装備品について、野焼き支援ボランティアに使いやすいものを検討したり、地域の火引き作業をする方への支給等を検討します。

また、ジェットシューターや、動力噴霧器、連絡を取るトランシーバー等の装備品についても行政等と協力しながら拡充させていきます。伝統的な野焼きですが、安全を考慮し、ボランティアでもできる、より安全な方法を常に探していきます。そのために、全国の火入れの情報の入手にも努め、他地域の良い点についても積極的に情報の収集、公開に努めます。

（４）牧野との連携

野焼きの際に実際に火をつけるのは牧野組合員のため、安全に野焼きを実施するには、地元牧野組合との連携が必要です。そのため、阿蘇グリーンストックは地元牧野組合員に対しても安全意識や技術、装備等の向上を一緒に検討していくとともに、牧野間での事故の事例やいい取り組み等の情報共有をサポートします。

たとえば、県の事業で実施している「阿蘇草原維持・再生事業」では、野焼き従事者の後継者育成に向けた支援を実施しています。これは、野焼きの技術を次の担い手に伝えるために、研修会を開催するものです。阿蘇グリーンストックでは引き続き県や市町村等とともに野焼きの後継者育成のための事業に取り組みます。

また、牧野組合等からの要望に応じて野焼き再開にむけた支援及び野焼きの作業省力化に向けた支援に取り組んでいきます。

（5）調査研究

阿蘇の草原の価値を守り育てていくためには、調査研究は不可欠な要素です。様々な調査研究が考えられますが、たとえば、植物の調査研究（植生調査等）を行うことで、野焼きをはじめとした草原保全活動の結果を正しく把握し、新たな活動につなげたり、その意義を多くの人に伝えることができます。また、文化的な調査（聞き取り調査）を行うことで、過去の人と自然の関わりを明らかにし、その歴史的な意義を明らかにすることができます（図６）。さらには、水環境や CO_2 と火入れ及び草原の関係性の研究など、社会的意義の高い研究についてもその知見の蓄積が求められます。

阿蘇グリーンストックでは、阿蘇の草原の知の蓄積の拠点として、様々な研究者と協力して、調査研究の実施及び成果の収集に努めます。また、そのための書籍の配架についても環境省等と検討を進めます。

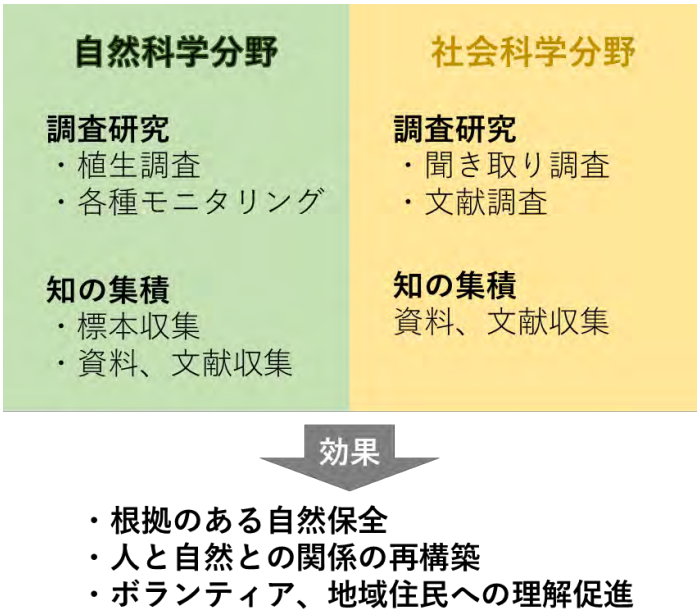
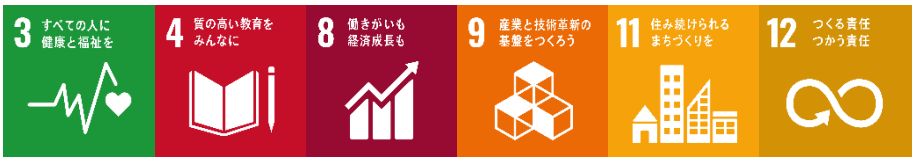


図６．調査研究の実施項目及びその効果



５．フロー部分（人と人の交流促進事業・緑を活かすための事業）

阿蘇の自然を持続的に維持するには社会的にも経済的にも自然を利用し、人と自然が持続可能な形で維持されることが求められます。したがって、阿蘇グリーンストックは守った自然を活かし、そして交流を生み、そしてボランティアを確保し草原を維持するサイクルを回し続ける必要があります。このフロー部分では、「阿蘇の大地を後世に引き継いでいく」ために「人と人が交流する」、「自然を積極活用する」点について具体的な取組を記述します。

（１）人と人の交流促進事業

阿蘇グリーンストック理念にもある「農村、都市、企業、行政４者の連携により阿蘇の緑の大地を後世に引き継ぐ」ことを目的として、その草原をはじめとする自然の価値への気づき、興味を促進する事業を展開し、将来に向けた市民参加を促します。

具体的には以下の事業を実施します。

① ゆたっと村事業
② 教育旅行事業
③ 環境教育事業
④ 情報発信、コミュニケーション事業

①ゆたっと村事業

ゆたっと村は「都市と農村の交流施設」として移築されたものであり、農村体験の施設として宿泊や農作業体験の場として活用されています。また、現在では野焼き支援ボランティアの宿泊場所としての活用も多くあります。また、ゆたっと村内の農産物（クリやブルーベリー等）を活用した特産品づくりやオートキャンプ場（収益事業化）も検討されており、多様な事業が展開されています。今後以下の２点について重点的に取り組んでいきます。

１つ目は「ボランティアの宿泊場所としての機能強化」です。数多く来るボランティアへの利便性の提供として、より快適な宿泊環境の提供を図ります。また、日帰りではなく１泊や２泊の宿泊利用により、今より多くのボランティアの獲得を目指します。具体的には、コロナ対策や、２階部分の改修、寒さ対策といった利用者の利便性向上を図ります。早急に実施するために各種補助金の活用を目指します。

２つ目は阿蘇の草原を活かしたモデル的な農村風景の構築です。ただ単に特産物を育てる

のではなく、阿蘇の草原と農地のつながりを表すような農業の手法であったり（野草をたい肥やマルチに使うなど）、阿蘇の伝統野菜であったり、生物多様性を保全するような取組であったり（昆虫と植物の相互関係が分かる素材（例：ニホンミツバチを活用した受粉作業）や有機農業等）、何かしら阿蘇の自然と農業のつながりのストーリーを持ったものを実践、見える化することで、阿蘇の草原が農業に活用されていることが実感できる場を作り、阿蘇世界農業遺産の価値の見える化を図ります。また、その価値の見える化がブランドとして機能することで、付加価値の高い農産品として収益化も見込んでいきます。

②教育旅行事業

これまで､阿蘇グリーンストックでは県外などの修学旅行生を阿蘇の一般家庭へ民泊させる事業を実施してきました。阿蘇の暮らしを都市部の若者に知ってもらう事業としては大変意義のある事業であり、またニーズも多い事業であると考えられます。今後、修学旅行のニーズに対して的確に対応できるように農村民泊の受け入れ家庭を増やすとともに、受け入れ家庭へのインセンティブも含め実施体制の強化に努めるほか、阿蘇らしい教育旅行メニューの開発に努めます。

③環境教育事業

阿蘇グリーンストックでは主に阿蘇郡市内の学校に対して出前講座や体験学習の提案･コーディネート・指導を行っています。今後、県内の他地域と連携したり、部活動や塾などの合宿・ゼミ旅行等においても草原を用いたプログラムを用意するなど、より広域的に旅行会社や地元旅館とともに実施していきます。また、環境教育のカリキュラムとして小学校や中学校の学習指導要領との整合の取れたプログラムや、大学での講義等、学生との接点を持つ場を増やし、阿蘇の草原の価値の認知を上げる取り組みを実施します。さらには、草原をはじめとした取り組みへの視察や各研究機関との調査研究についても対応する体制を構築します。

④情報発信、コミュニケーション事業

阿蘇グリーンストックでは対外的な情報発信について広報誌「草原だより」を発行しているほか、ブログへの書き込み、インスタグラム、フェイスブックを活用しています。また、設立時より、熊日新聞をはじめ多くのメディアへの露出もあります。新聞や情報誌など、い

わゆる「マス」向けのメディアはこれまで通り実施していくことが求められます。「ソーシャルメディア」としてはSNSとブログの運営が2009年より実施されています。2009年当時ではブログ運営が主流でしたが、2009年以降Twitterが普及し、2014年からはInstagramが普及しています。現在では、これらのSNSから消費者が「よし、参加しよう（買おう）」となるまでの消費行動プロセスのモデルとしてSIPSという概念が示されています（図7）。このモデルがこれまでのマーケティング理論と大きく異なるのが、これまでのマーケティングの入り口はアテンション（気づいてもらう）であり、広告の持つ意味が大きかったのですが、現在では顧客との関係性をどのように構築するか、どのように財団の活動や商品に共感してもらえるかが重要なポイントとなっています。このようなことから、今では、多くの企業がこれらの公式アカウントを作成し顧客とのコミュニケーションを図っています。阿蘇グリーンストックにおいても、現在あるInstagramの活用を進め、対外的に多くの人に活動に共感してもらうことを進める必要があり、このSIPSのサイクルを回すことを心がけます。さらに阿蘇草原保全活動センターでは、上記で獲得した参加者（コミュニティ）とともにイベント・企画を実施し、共感を広げるハコとしてのSNS活用を目指します。

図７．情報発信の基本的な考え方

https://adv.yomiuri.co.jp/ojo_archive/tokusyu/201506/201506toku3.html

また、2007 年から日本でもサービスを開始している Youtube については、近年では情報収集のために視聴するという利用が増えてきていることから、ボランティアの様子等についての情報発信についても動画の活用も進めます。

対内的（対ボランティア）への情報発信は現在 facebook や LINE を活用しています。特に LINE の機能（例えばボランティア参加ごとにクーポンやスタンプ付与など）を充実させ、ボランティアの満足度向上に努めます。また、ボランティアの活動データの収集、分析、活用は新しいボランティア獲得やボランティアと作業内容のミスマッチを防ぐためにも重要であることから、これらの情報の管理体制を強化します。

また、寄付を頂いた方や活動に協賛してくれている方向けのフォロー（お礼状や寄付金の使途の情報発信）等も実施します。

これらの情報発信、コミュニケーション事業の実施は専門性も高く重要なことから専門的人材の活用もしくは人材育成を図ります。

（２）自然を積極的に活かすための事業

阿蘇グリーンストック理念にもある「土と命をいつくしむ産業を振興し、阿蘇の伝統文化と生業の維持・再生に取り組んでいく」ことを目的として、その自然から得られる資源を活用した事業を展開します。また、自然の維持の基盤としての牧野組合をはじめ農業従事者の存在が大きいことから、それらを支えるセーフティネットとして経済的な支援になる事業を実施します。

①　(株)GS コーポレーションとの連携で取り組む事業

１）あか牛産直事業

あか牛は現在の阿蘇の草原を維持するための経済を回す最も大きな要因です。したがってあか牛の振興を図り、今後のあか牛の需要開拓や産業振興のため、地域内一貫生産体制の構築による１頭買い方式のあか牛産直事業の推進を行います。

２）茅の活用事業

茅事業は阿蘇地域の茅の活用事例としても、日本の伝統建築の保存のためにも意義のある事業です。また全国的に茅材は需要が供給に比べて多く、不足している状態にあり、特に西日本には大規模な茅場がないため、阿蘇のような産地が供給機能を発揮することは社会的意義の大きい事業であると考えられます。茅を刈り、刈った束を茅葺職人が使用できる状態

に調整し、保管する作業を一元化し、購入先の茅葺職人と繋がることで、安定した販路が確保できることから、このワンストップサービスの構築を図ります。また、文化財の修復のみならず、草小積みなどの用途でも活用し、地域の伝統を守ります。さらに、現代建築やアート、仮設工作物など、茅ぶきを見ることのできる場所を阿蘇内に多く作る事業も実施し、新たな需要の喚起や普及啓発を行います

３）阿蘇の特産品開発及び農産物の生産販売事業

あか牛や草原再生シールの会の農産品など、阿蘇の草原保全と関係する農産品について、直販物品をパッケージ化し販売します。具体的には百貨店など、ある程度収益性が見込まれる場所にむけての販路を開拓していきます。また、草原の恵みである「水」を活かした産品（日本酒やウイスキー、ビール等）の開発に向けての検討を始めます。

②　公益財団法人として取り組む事業

１）あか牛オーナー制度

あか牛オーナー制度は都市市民がオーナーとなって、有畜農家へ無利子での融資を行い繁殖あか牛を導入してもらうことで、放牧数を増やすとともに、あか牛肉の消費拡大にもつなげていくことを目的としている事業です。オーナーさんと農家との交流会や体験会の開催を通して、草原保全の重要性を伝える役割も果たしてきました。一方で、導入資金貸付については高齢の農家は制度利用を躊躇していたり、後継者がいる農家や新規就農の農家では資金貸付のニーズがあるものの、本制度では「無利子」以外の魅力が少なく他の融資制度を利用するなどの課題が出てきています。したがって、借りる側（農家）のニーズに合った資金貸付を検討するともに、農家とオーナーとの関係構築に向けた企画の検討を早急に進めます。

さらに、あか牛の振興を図るための百貨店や焼肉店といったこれまでにない販売チャンネルとの連携など、新たな販路の拡大を図ります。

２）グリーンツーリズム事業（草原ツアー等）

阿蘇は九州随一の観光地であり、多くの観光客が来訪しています。その多くが草原を目的に来訪しているとされますが、草原に触れることのできる（草原の中に入れる）場所は草千里など一部に限られます。また、観光客が草原を散策したとしても、解説などがないため、その魅力を感じることができないのも課題としてあげられます。地元側からすると口蹄疫

などの伝染病の問題や草原は自分たちの土地であるため、不特定多数の観光客に草原に入ってほしくないという意向もあります。そこで阿蘇グリーンストックが中核支援団体として間を取り持ち、ニーズのマッチングや観光利用のルールを決めそれを運用することで、体験型のアクティビティができる草原を作ります。この場合、阿蘇グリーンストックが行うのは中核支援組織としての利用調整であって、イベントは各地域事業者が行うものとします。

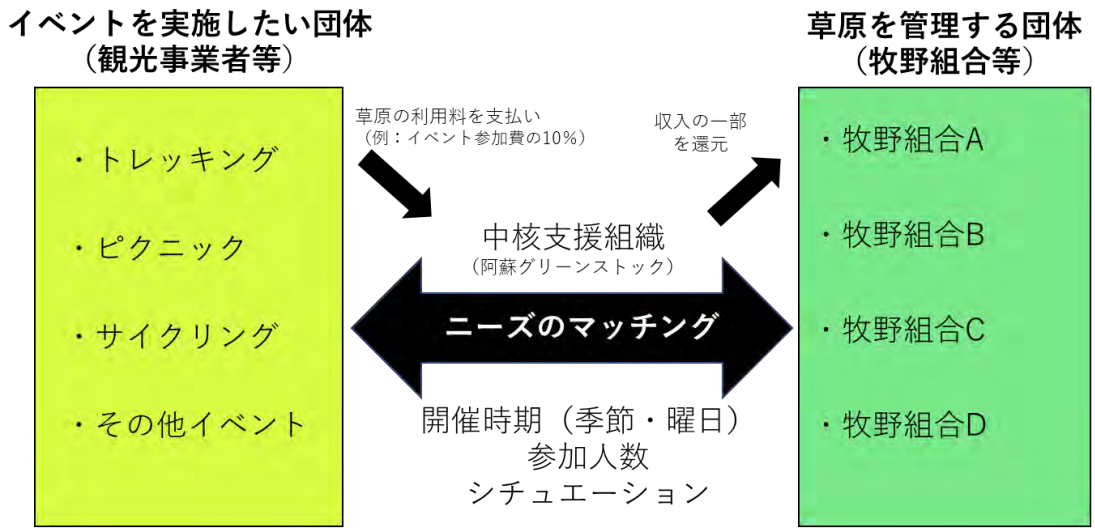


図８．阿蘇グリーンストックのグリーンツーリズムにおける役割

３）阿蘇草原保全活動センター活用事業

阿蘇草原保全活動センター（草原情報館及び草原学習館）は、草原利活用に重点を置いた施設として、来訪者、農業者、地元住民等を含めた多くの人々が、自主的、かつ、主体的に行う草原学習や草原維持に関する実践活動を支援する拠点施設として設置されたものであることから、その設置目的に鑑み、利用の促進を図ります。

６．他団体との連携

阿蘇グリーンストック理念にもある「農村、都市、企業、行政４者の連携」を図るために、以下の取組みを実施します

（１）行政との連携

阿蘇グリーンストックの活動はすべて、阿蘇の自然の維持、そして阿蘇の人の生活の維持のために行われている極めて公益性の高い活動であり、自らの事業収入だけで活動を実施していくことは困難です。そのため、熊本県や阿蘇地域７市町村と連携し、事業を支援していただくことが不可欠です。また、将来にわたって草原が維持できる体制がなければ阿蘇の草原が世界文化遺産に登録されることも難しいでしょう。したがって、行政に対し、私たちの活動を伝え、理解していただき、広く支援をいただくことが求められます。具体的には、９月～10 月頃に国、県、地元自治体に参加いただき、来年度の草原に向けた予算について、どのような支援メニューが考えられるか、一緒に検討する場を作ることを検討していきます。

（２）企業との連携

阿蘇グリーンストックはこれまでも様々な企業の寄付先として選ばれている実績があります。これは、阿蘇グリーンストックの活動の公益性が認められているからであると考えられます。寄付金の使途を明確にし、寄付した企業にとってもその成果が見やすい状況を作ります。また、企業の福利厚生・社会貢献事業としてもボランティア活動を活用していただくなど、企業との接点を増やします。また、草原を活かした新たなビジネスを創出するためのプラットフォームを作り、多様なアイデアによって草原活用を検討します。

さらに大量の地下水を使用する半導体産業の進出等が相次ぐことから、水保全の観点も踏まえ、菊陽・大津等に拡大する半導体工場への支援の働きかけを進めます。

（３）国立公園（環境省）との連携

阿蘇グリーンストックは 2003 年に国立公園管理団体第１号として環境大臣から指定されました。公園管理団体の業務として、植生の復元等の自然の風景地の管理、歩道や園地などの公園の利用施設の点検・補修などの維持管理、公園内の自然情報の収集・提供などがあり

ます。今後もこれらの専門的な業務を環境省から受託することを目指します。さらに阿蘇くじゅう国立公園の新たな管理運営計画の策定にも積極的に関わります。

（４）関係機関との連携

阿蘇グリーンストックは地域内の多様な機関と連携しながら事業を実施しています。また、中核支援組織として機能するためには、多様な関係機関との意思疎通が必要となってきます。したがって阿蘇グリーンストックでは各職員が随時様々な関係機関と連絡を取り合い、業務を実施していきます。

●協議会等

・阿蘇草原再生協議会
・阿蘇草原再生千年委員会
・阿蘇地域世界農業遺産推進協会
・阿蘇ジオパーク推進協議会
・阿蘇世界文化遺産登録推進協議会

●団体等

・公益財団法人　阿蘇地域振興デザインセンター
・公益財団法人　阿蘇火山博物館
・NPO 法人　ＡＳＯ田園空間博物館
・NPO 法人　九州バイオマスフォーラム
・阿蘇ネイチャーランド
・国立阿蘇青少年交流の家
・各大学（熊本県立大学、東海大学、県立農業大学、東京農業大学等）
・各市町村の観光協会等

７．経営基盤の強化

これまで記載した活動を推進していくためには人材と財政の基盤を強化することが求められます。しかし、これまでの阿蘇グリーンストックでは賃金水準の問題や暫定的な財源のために職員の入れ替わりが激しい（長く続かない）ことが続いてきており、人員不足が続いています。

この要因は財政基盤が確立していないという点が要因でもあり、この人材と財政の課題を解決することで経営基盤の強化を図ります。

（１）人材の育成・確保

・公務員に準ずる給与体系
・柔軟な勤務時間、体制
・財団のビジョンを明確にする
・個人のやりたいことを応援する
・各種研修や技能実習を支援する

（２）財政基盤の強化

・行政への支援依頼
・行政や企業の各種補助金の獲得
・行政の委託事業の受託
・収益事業の見直し及び、保有する原野、山林、田畑の有効活用
・企業版ふるさと納税等の各種制度や助成金の積極活用

資料編

１．阿蘇グリーンストック中期構想検討委員会の経緯

年	月	日	協議事項
2019 年	3	15	副理事長・専務協議
	7	8	中期構想協議（村上常務参加）
	8	7	事務局協議
	8	27	職員ワークショップ
	8	30	事務局協議
	9	27	事務局協議
	11	27	責任者会議
2020 年	1	29	プロジェクト会議
	8	**6**	**第 1 回中期構想検討委員会**
	9	25	事務局協議
	10	**29**	**第 2 回中期構想検討委員会（坂本先生、岡本所長講演）**
2021 年	1	6	事務局協議
	2	24	事務局協議
	4	14	事務局協議
	4	**28**	**第 3 回中期構想検討委員会（各委員レポート発表）**
	6	17	事務局協議
	11	9	事務局協議
2022 年	4	15	事務局協議
	4	23	リーダー全体会にて中期構想紹介
	5	**10**	**第 4 回中期構想検討委員会**

２．阿蘇グリーンストック中期構想検討委員会　委員構成　（2022 年 5 月時点）

高橋　佳孝	阿蘇草原再生協議会　会長
岩本　和也	野焼き支援ボランティアの会　代表
上野　裕治	元長岡造形大学教授　野焼き支援ボランティアリーダー
岡本　哲夫	元熊本県職員、元山都町副町長
山内　康二	公益財団法人　阿蘇グリーンストック　副理事長
桐原　章	公益財団法人　阿蘇グリーンストック　専務理事
増井　太樹	公益財団法人　阿蘇グリーンストック　部長
鷲津　大輔	公益財団法人　阿蘇グリーンストック　部長

３．阿蘇グリーンストック中期構想検討委員会　設置規約

阿蘇グリーンストック中期構想検討委員会 設置規約

（名 称）

第１条 本会は、阿蘇グリーンストック中期構想検討委員会 （以下「委員会」という。）と称する。

（目 的）

第２条 委員会は、阿蘇グリーンストックのグリーンストック理念に基づき、当年度より概ね５年間の中期的な整備計画として中期構想を立案するものとする。

（構成員）

第３条 委員会は、別紙に掲げる委員をもって構成する。ただし、必要に応じ構成員以外の者の出席を求めることができる。

（座 長）

第４条 委員会に座長を置き、委員の互選によってこれを定める。

２ 座長は会務を総括し、委員会の議長となる。

（会 議）

第５条 委員会は、座長が必要と認める場合は、委員以外の出席を求める事ができる。

（事務局）

第６条 委員会の事務局を（公財）阿蘇グリーンストック内に設置する。

（雑則）

第７条 この規約に定めるもののほか、本会議の運営に関し必要な事項は、本会議で検討する。

附 則

本規約は，令和 2 年 6 月 10 日から施行する。